

Ⅱ. 地域からみた諸問題

地域からみた諸問題

柳 時 中

一、始めに

韓国の近代化は時期的に百年の歴史をもつといわれている。こうした近代化の歩みはその大部分が苦痛にみちた悲劇的な過程でもあった。朝鮮王朝の末期的な兆候でいろどられる人々の苦しみ、列強からの侵略の脅威、四十年間にわたる日本帝国主義的支配の後によりやく独立を得たものの、その後も苦難の歴史であった。アメリカ、ソビエト軍隊の進駐、南北分断、それによる思想・理念・体制の対立、これに続く朝鮮戦争（韓国では一般的に韓国動乱という）とその戦乱が残した後遺症などといった悲劇的なことからの連続であった。

こうした苦痛と逆境は自己の民族にたいする誇りと自信を喪失し、韓国の知識層の一部では自らを自虐する風潮までも生んだのであった。その一つの例が今でも韓国における一部のインテリで使われている「葉錢」という言葉である。その意味は韓国民族は他に誇り得る伝統をもっていないかったと考えていることの表現である。

しかし、どの民族も永久に虐げられるものではないのが、歴史の真実で

あろう。一九六〇年代を起点とする韓国の経済発展は、韓国人には自己にたいする誇りと自信を与え、外からは驚異の目でみられるようになった。と同時に近代化の大部分の過程で唾棄すべきものであり、時代遅れとされた伝統をみずから見直そうという動きが韓国では活発化している。

ところで、伝統という言葉はよく使われていて自明の意味をもつと考えられているが、概念の混乱がある。伝統は大まかに二つに分けられよう。文化的伝統 (cultural tradition) と伝統社会の文化 (culture of traditional society) がそれである。前者を過去から現在まで連続し伝承され、現在でも支配的慣習として生きている行為の様式とするならば、後者は過去には支配的慣習であったが、現代の社会ではその適合性を失ったものと規定することができよう。しかし、実際には両者の区別は難しい。

地域社会と関連のある伝統を中心にしてみた場合、通文化的に共通する伝統があり、近代化はこれらの伝統を変化せしめる社会変動のプロセスであり、広範な社会構造の変化である。そして伝統から近代化への変化はその伝統が通文化的な共通項をもつと同時に独自の性格をもつものである。したがって、国によって社会によって、近代化のプロセスでも独自の展開がある訳である。

歴史的に限定して朝鮮王朝時代の伝統がいかなるものであるかは学者により、視角によりすべての側面にわたってコンセンサスがあることではない。伝統を社会文化的に限ってもいろいろの内容を指摘することができよう。

まず、伝統を生活様式、慣行とした場合、それには行動様式、価値規範などが含まれるが、朝鮮王朝時代（以下朝鮮時代と呼ぶ）の支配的価値規

範は儒教のそれであろう。といっても、儒教が行動様式とその行動様式の規準となる価値規範が当時の社会において支配的であったかについてはいろいろの論議もあろう。というのは朝鮮時代の前王朝は高麗朝であるからである。高麗朝はよく知られているようにその後期にいたって儒教が積極的に導入され、その影響を制度面、政策面などで受けるようになるが、本的には仏教国家であり、仏教社会であった。ところが、朝鮮時代は儒教を国是とし、生活面、政治面で儒教を取り入れるのに非常に積極的であった。朝鮮社会が儒教国家或は儒教社会といわれるゆえんもここにある。もともと朝鮮時代の前期には仏教への信心が深かった王も少なくなかったし、王妃も仏教に帰依する傾向がつよく、また、頻繁にシャーマニズム的な呪術が王室の内殿深くで盛行したのであった。

こうした多くの事例があつたけれども、朝鮮時代は基本的に儒教を国是とし、それを政策、制度面、生活面に徹底しようとした努力は殆んど変りなく朝鮮王朝五百年を貫いたのであるから、身分的、地域的違いはあるけれども、もともと基幹的であり広範な生活様式であつたのは儒教文化であつたことには、異論がないと思う。

二、韓国の近代化と地域社会の変化

上述したように韓国近代化の歴史は朝鮮時代の末期の開化期を起点として約百年である。近代化は一言にして社会構造の変化であるがいろいろな側面をもつものであり、大きく分けて工業化、都市化、価値規範・生活様式の近代化、の三つの側面が主軸をなす。本テーマの焦点は韓国の近代化

が都市化を中心に地域社会においてどのように展開されたかをみることにある。こうした近代化のプロセスはしたがって朝鮮王朝末の「開化期」と約四十年にわたる日本の植民地であった時期をも含むのであるが、ここでは韓国の解放以降の事象に限定する。一九四五年以後、韓国における地域社会の変化においてもっとも大きな特色は都市化である。すなわち、一九四五年以降の急激な都市人口の増加は韓国の独立、朝鮮戦争以来の傾向である。村落社会における旧地主階層の農地改革による生活の脅威、農村の疲弊、治安の不安が彼等をして都市に向わしめたのであり、朝鮮戦争前後にわたる越南民（北朝鮮から南にきた人）もその大部分がソウルおよび地方都市に定着地を求めたのである。北から南に移動した人々の多くは北の社会では歓迎されない階層である。元公務員、旧地主、富農、商人、インテリ、キリスト教徒とその家族たちであった。命からがら北から南に逃げてきた人々には生活の糧を都市で求めざるを得なかったのである。

このような急激な都市人口の増加は韓国の都市における「板子村」をもたらした。都市の周辺、空地にはにわか造りのトタン、ブリキ、木片の板子村を急増させていった。板子村の出現は韓国の経済と社会が戦乱と都市の人口増でいかに苦境におち入ったかを物語る端的な表現であった。こうした韓国での悲劇の時期は日本が敗戦後の混乱と欠乏から今日の繁栄をもたらす起爆剤となった「特需」景気をもたらすようになった時期であったことは皮肉である。そしてこの時期に、もし彼等が南に残っていたならば韓国の近代化の促進に多大な貢献をしたであろう各分野のエリート層の多くが強制または自意で北朝鮮に向ったのである。

一九六〇年代からの韓国における人口の地域移動は休戦線を境界とする

北と南が全く分断された形で、南だけの国内移動であるという点にその特徴があり、近代的意味における都市化、産業化に連がる封鎖人口としての人口移動である。都市化が加速度的に展開される。

一九七〇年代に入ってから全都市人口の流れが、依然として離村向都であつてもいくぶん新しい傾向がみられた。すなわち、工業化が進む地方の都市、工業団地をもつ都市への人口移動である。数次にわたる経済発展五ヶ年計画は地方の工業発展をもたらし、離村の一部の人口はそれら工業団地へ移動したのである。東南海岸の工業ベルトといわれる一九六七年からの蔚山の精油化学、浦項の製鉄、馬山、昌原の輸出工業、鎮海の肥料化学工業、麗天（麗水・順天）の精油・火力発電がそれらである。内陸では大邱の繊維、全州の製紙、光州の自動車、亀尾の繊維、電子工業団地も離村人口吸収の一翼をになった。

しかし、こうした変化はあつたが、人口の大きな流れは大都市指向であつて、ソウルと釜山への移動である。韓国ではこれを二極化現象という。一九六〇年代はソウルへの全国人口の一点集中であつたが、その後釜山にも人口の高率の集中があつた。また、ソウル、釜山を中心にして周辺の住宅化・工業化による郊外化の現象が顕著に現われるようになった。

六〇年以後のソウルへの大幅な人口増加と肥大化の要因はいろいろあるが、重要なものをあげれば次の通りである。

- (1) 工業化——労働集約的な製造業がソウルに集中していること
- (2) 教育を受ける機会に恵まれていること
- (3) 社会生活におけるニーズを充足してくれる広範な社会文化的施設を

具えていること

(4) 華やかで、自由、野望をみだし、出世の欲求を充足する場所と考えること

(5) 農村における農地所有の零細性、農業の低生産性、自然増加による過剰人口

(6) 家族・親族意識・連帯の弱体化

(7) 交通網（鉄道、バス、高速道路）の発達とマスメディアによる都市文化の拡散

(8) その他、行政地域の改編、ソウル人口の自然増加

このような一連の諸要因は発展途上国家の都市化要因としてよく指摘される理論、プル・ファクターとプッシュ・ファクターとも関わりがある。

すなわち、(1)、(2)、(3)、(4)はプル・ファクターとしてはたらく、(5)、(6)はプッシュ・ファクターとして作用し、(7)は人口移動の媒体であるといった説明である。

都市化は韓国社会における近代化のプロセスの一側面であるが、国と地域社会に多くの問題をもたらす。都市と農村、都市でもソウルと地方都市、そして都市と農村を含む地域（地方）がそれぞれの問題をかかえることになる。

まず、ソウルを始めとする大都市の場合である。①住宅難 ②三次産業の不健全な膨張 ③公園、緑地の不足 ④道路、駐車場といった社会資本不足による交通難 ⑤犯罪・非行 ⑥公害 ⑦無許可不良住宅（スクオッター・エリア） ⑧地価の高騰などがそれらである。

次に地方の中小都市の場合は、ソウルなど大都市への過度の人口、産業・サービス機能の集中により人口、経済、文化などの発展がたちおくれ、都

市の開発と発展が停滞するといった悩みをかかえることになる。

一方、多くの生産年齢人口を都市に送りだした村落は村落なりに、その発展に問題点をもつ。生産年齢層が過度に移動することによって、労働力の量的・質的低下をきたし、過疎化の現象がみられる。

こうした地域社会間の不均衡は個別的な地域社会（都市・町・村）とそれらを含む地域（地方）の問題とからみあう。ソウル、京畿道と釜山、慶南の地域は近年人口の増加の勢いにあるが、他の市道はその人口が減少の傾向にある。京畿道の人口増加は京畿道がソウルに隣接しており、ソウル人口の周辺地域への拡散と都市施設、産業体の京畿道への移転と新設によるものである。慶尚南道における人口増加は韓国の第二の都市、釜山に隣接し、東南海工業ベルトの諸工業団地がこの地域に立地しているのによるものである。市道別の一人当りの所得水準もこの両地域が高く、他の市、道のそれは低い。

このような地域社会或は地方レベルの不均衡は階層的にみると階層間の貧富の隔差につながり、そのコントラストの様相は大都市とくにソウルに鮮明に現われている。

結局、一九六〇年代以後の都市化と地域変化は「離村向都」の一言につきるといわれているが、一九六〇年代は韓国における経済発展計画の効果地域社会に具体化されない時期の難民的な離村向都であった。一九七〇年代以後は経済的発展の効果が大幅にあらわれ、工業都市、郊外化などがみられる地域変化のパターンがはっきりするようになる。

そして、現時点としては韓国の近代化すなわち、都市化、産業化（工業化）は都市と村落、都市の中ではソウルと地方都市、大都市と中小都市の

発展の不均衡をもたらし、ひいてはこれら市・町・村を含む地方間の発展の格差を深め、さらには、もつ者ともたざる者の所得格差を広めたという諸問題点をかかえるようになった。

三、光の部分としての伝統

前述したように地域社会における都市化と工業化はそれぞれのレベルにさまざまな明暗を与えながらも、総じて韓国の近代化、特に経済の発展は世界的に驚異的となっており、また地域開発も発展途上国家としては成功したものと評価されるのが一般的である。このような近代化を促進した社会文化的な要因は韓国の伝統——儒教文化とどのような絡み合いがあるかは本論議において重要である。少なくとも次のいくつかは儒教の伝統が光の部分として働いたものと思われる。

まず、指摘せねばならないのは管理、組織の経験と能力の伝統をもっていたという点である。

近代化の特色の一つは社会的分化の進展で、社会構造が複雑になるのである。したがって、現代社会（近代化が進んだ社会）は社会的分化による複雑な社会構造的諸要素の機能的統合が必要となり、その統合には高度の組織と管理の能力が要求される。

朝鮮社会は儒教国家といわれる一方、両班官僚国家と呼ばれる。朝鮮社会が両班官僚国家といわれるゆえんは両班を支配身分層、すなわち、官僚組織の頂点におき、統制と牽制といった調和のとれた官僚組織が運営されたのである。朝鮮社会は王政であり、ある意味では王の専制政治であった。

しかし、朝鮮社会における王と両班による支配のシステムは王の専制と両班の専横を規制する装置のもとに道、府、郡、県などの整然とした行政組織をもち、中央集権的に組織、管理する数百年の経験をもっていた。こうした組織・管理の豊かな経験は朝鮮王朝の数百年を存続せしめる基盤であった。もっともこうした経験は、その末期的な病理により王朝の末頃は充分な成果をあげることができなかったのは事実である。しかし、その現象は歴史的にいかに立派な行政管理組織も必ず末期的兆候をもつものであるという点で他の王朝の歴史にも、ともにみられることである。

韓国の日本支配下の経験は韓国近代化の途を一步進めたものといえるが、それは日本軍国主義が自己の利益の拡大の道具としたのであって、韓国の近代化を第一次的に考えたものでないと理解されている。組織・管理の面からみた場合、植民地時代におけるその能力と経験はその水準においてむしろ後退したといえる。というのは韓国人は日本の近代的教育を受け、充分な資質があっても、行政、産業の組織で政策決定層になることができない不幸な存在であったからである。あたかも朝鮮社会における中人身分層と同じ存在であった。²⁾日本の上司の決定事項を韓国人は実務的に遂行した。こうした韓国人の植民地時代における管理、組織の貧弱な経験は一九四五年以後の官僚の組織機能の混乱にも繋がった。敗戦による日本人の上級官吏、企業体の幹部層の引揚げは南北の分断、思想・理念の対立、経済的混乱と相俟って、韓国の殆どどの管理機能を麻痺せしめた。それをカバーするために、歴代の韓国大統領のなかで、もっとも反日的であった李承晩博士が親日的人々を重用する契機になったのである。

さらに韓国の伝統が近代化促進に寄与したものは朝鮮朝の官僚社会が部

分的に開かれた社会であり、そこには業績の原理が強く働いていた点である。朝鮮社会は身分制度の社会であることは周知の事実である。ところで、支配階級である両班といえども、すべてが特権階級として栄達するものではなかった。両班はしたがって、その一部が高位官僚に任命され、富と名譽と家門の栄達を図ることができるのであるが、その道は科擧であつた。原則として、両班の身分層でも官吏になるためにはこの科擧に合格しなければならなかつた。科擧の合格は血の滲むような努力なしに得られなかつた。能力と努力をふまえた競争であり、業績的地位の達成であつた。

競争と業績的地位の強調は現代社会の特色の一つである。業績的地位の達成の如何を左右する鍵は教育である。教育を通じての業績の強調は韓国の今の社会に引き継がれている。農村、都市、階層を問わず、韓国人の、自身または子女への教育熱はよく知られている事実である。ソウルへの移住者を対象として、ソウル移住の動機を調査した研究がいくつかあるが、通的にみられるソウル移住の動機の主たるものは就業と教育(本人の教育、女の教育)を受けるためである。こうした教育熱は少なくとも朝鮮社会からの伝統である。

教育と業績の原理をふまえた内的システムと共に朝鮮社会は対外的にも半ば開かれたシステムであつたように思える。たしかに伝統社会は基本的に身分社会であり、封鎖社会である。同じく漢字文化圏に属する中国、韓国、日本の近代以前の社会は封鎖社会、身分社会であつた。しかし、相対的にみると中国のそれは外向きとするならば、日本は内向きであり、朝鮮は両者の中間位置にあつたといえよう。中国の伝統社会は自らが中華であり、周囲の諸国は夷狄と考へた。したがって中国は自国を中心として周辺

の諸国に関心と関係をもつといった意味で外向きである。日本の伝統社会(徳川時代)は対外的に封鎖政策を取つたのにたいし、朝鮮社会は半ば開ざされた社会と同時に半ば開かれた社会である。というのは朝鮮社会は中国にたいしては開かれており、日本にたいしては閉ざされていたからである。すなわち、朝鮮王朝は中国の動きに敏感であり、その文物を積極的に取り入れたのである。こうした先進文化の積極的摂取の伝統は今の韓国の近代化の促進にプラスの機能として作用する訳である。

文化変動論の立場からみて、伝統文化と異質文化との接触は摩擦を起しがちである。韓国の儒教文化とアメリカの現代文化の間には異質的要素が多い。韓国社会も現在、伝統文化と欧米文化との接触により摩擦と葛藤があるのは明白である。価値規範の混乱、アノミー論が韓国社会でさかんに論議されている。こうした問題点があるにも拘らず、今の韓国社会は欧米文化の受容に非常に積極的である。すなわち、韓国の伝統文化との葛藤を覚悟の上で欧米文化を取り入れるのであるが、これは朝鮮社会からの伝統である。こうした伝統は日本の韓国支配下でも抑制されたのでなく助長されたものであつた。というのは植民地時代の韓国人は日本人が欧米にたいする抵抗とコンプレックスをエネルギーにして欧米文化の摂取に積極的であることをまのあたりにみてきたからである。

次は家族主義を原型とする共同体主義の伝統である。レオン・ヴァンデルメールシュは儒教の真髄を三つにしばっている。家族、儀礼、高級官僚制度である。彼は儒教的遺産としてこの三つを東アジアにおける工業化、近代化の原動力として意味付けをしている。彼がいう家族のもつ意味は家族・親族関係・組織が原型となる共同体主義である。確かに、彼がいうよ

うに家族の基本的関係は「三綱五倫」でありそれは社会関係の範型である。五倫とは父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の間にそれぞれ成立する関係であり、この五つの関係は父子の関係を核として家族内外を律する枠である。韓国では儒教の道徳律で忠と孝とが強調されるが、その強調の程度は孝に傾く意味で日本よりなお家族主義的である。したがって、家族関係を律する枠は外の社会に拡大され地縁とも繋がりがあがる共同体意識が成立するのであるが、韓国の共同体意識は日本に比べてより血縁的である。

ともかく、血縁・地縁が要となる共同体志向の伝統は近代化に貢献した所がある慣行であった。韓国都市化の特色の一つは前に述べたように難民的な離村向都である。ソウルに移入した村人は人口の七―八割を占めるというが、彼等は都市生活への適応力が弱い。都市の安定した職を得るには低学歴、低技術である。都市の急激な人口増加はたとえ、都市の就業構造が多様であり、労働集約的な産業体が大幅に増加したとしても老大な数の村人に職場を充分に与える能力はない。

であるから貧困、低教育、低技術の村落民はその多くが肉体的労働者として日雇い、行商、チゲ運びといった不安定、半失業的な部門で生活の糧を得なければならぬ。女性にしてもそうである。彼女たちが探し求めた職場はサービス業、女中、工員といった低収入、低賃金のものである。都市におけるこうした低所得層は寢所を無許可の不良住宅地域に見つけなければならぬ。都市における貧民の集積であり、スクオッター・エリアの拡大である。一九六五年にはソウル人口の三六・一%が絶対貧困人口であり、主としてスクオッター・エリアに位置する不良住宅が一八万棟に達し、そこにはソウル人口の二九%が住んでいたのである（一九七一年）。

このような都市に流入した村落民は徐々に都市の生活にうまく適応していく。都市への移動の伝も親族、村人であり、就業も生活様式への適応も彼等の助けによることが多い。ガンスがいう「都市の村人」である。家族ぐるみで一生懸命働き、父母は自らの生活を犠牲にしてまで子供に教育を受けさせる。こうした村人の努力は社会的上昇につながる。したがって、アメリカのスラムやゲットーにみられる逸脱的な群衆とは大いにその性格を異にする。

さらに血縁を中心とする共同体主義は朝鮮社会で強調された家礼と相俟って韓国の近代化に光の要素として作用したことも見逃すことはできない。朝鮮社会の伝統である家礼とは中国の朱子学にもとづく五服制（冠婚葬祭）の儀礼である。朝鮮王朝は何べんとなく法令によって、この家礼を両班は勿論のこと庶民にもその施行を強要した。家礼を地域社会のあらゆる身分層に拡大させ、根をはることもっとも寄与したのは両班の儒者たちであった。朝鮮王朝の中期以後、著名な儒学者にして家礼に関して著述をもたない例は殆んどないといってよい程である。しかし、地域社会にこの家礼を深く滲透させたのは嶺南の士林であった。嶺南の士林は中央政界に進出し、王政を左右する時期もあったが、その大部分は地方官として府・郡・県の地域社会で、儒教による地域社会の振興に努め、官を辞しては郷里にかえり多くの門弟をかかえ学問に励んだのであった。そして彼等が儒教の実践倫理としてもっとも重要視したのが家礼、特に祖先の祭祀であった。この慣行は今も韓国では根強く残っている。韓国で「民族移動」ともいわれる旧正（旧暦のお正月）と秋夕（旧暦の八月十五日）にはソウルから地方へ、都市から村落への人口の大移動がみられる。その目的は祖先の

祭祀であり、儒教的家礼の施行である。同時にこの時は別離している家族、親族、村人との交驩が行われ、共同体意識を温めることになる。韓国この伝統も近代化の波にのって変質の度が高い。それでも、多くの人々は息子と親夫婦との同居は当然のこととし、老人を大切にし、日本人の目からすれば韓国の若い人は年上の人にたいして非常に礼儀正しい。

四、影の部分としての伝統

ところで、儒教文化が韓国の近代化に与えた影響は光の部分だけではなく、影の要素があるということは否定することができない。血縁を基本とする家族主義は家礼主義と相俟って近代化の進展にマイナス機能もあつたのである。

韓国の企業は財閥といった大企業、中小企業を問わず、その従業員の企業にたいするロイヤルティが低いというのが一般的評価である。それには企業主の独善、各企業にみられる煩雑な中間管理層のスカウト、年功序列終身雇用制の欠如などが理由としてあげられているが、そのもとを正せば、企業の組織管理が余りにも血縁を中心とする家族、親族主義にあるといえない。そうはいっても韓国企業の同族支配はそれなりに理由がない訳ではない。

韓国の大企業、財閥はその歴史が浅く、激動する社会での成長の過程には多くの危機を伴うことになる。この危機をのりこえるためにもっとも頼りになるものは親類・縁者以外にないと考える。このような考えは今の韓国企業主に強い。

儒教文化のもう一つの影の部分は過度の「崇文」と「好文」である。朝鮮社会でもっともはつきりした栄達の道は教育を受けることであり、学問に励むことである。この崇文のあまりに、両班は生産的である肉体的勤労を蔑視した。零落した両班でさえ、直接土を耕し、自ら商工業に従事するのを潔しとしなかった。韓国は現在、ホワイトカラーとブルーカラーの賃金格差が大きく、大学を出ていなければミドルにはなれない。また、名のある職人であっても子や孫がその家業を継ぐことは殆んど望まない。

日本の徳川時代における諸大名は幕府の支配、統制下にあつたとはいえず、それぞれの領地において商人と職人の保護に力を注いだ。ところが、朝鮮社会の官僚組織は既に述べたように本質的には機能的であつたが、日本に比べて画一的であり、中央集権的であつた。そのためか、朝鮮王朝の支配層は地方の商工業の保護と発展にあまり力を入れなかった。

それにも拘らず朝鮮白磁にみられるような、すばらしい名品を世にだしたのである。よく知られているように、朝鮮社会の手工業的技術は日本の手工業発達に大きな影響を与えた。壬辰・丁酉の乱（文録・慶長の役）の時に、日本に連行された多くの韓国の職人は日本の窯業発達に大いに貢献した。

逆境にあつた朝鮮社会の手工業的才能は朝鮮王朝の歴史とともに過去のものになつたと思われた。しかし、その伝統は韓国の近代化に伴って蘇生するかのようになり、近代工業生産で造形に表現されている技芸は高く評価される所である。

五、終りに

韓国における近代化は前述したように苦難の歴史であった。それにも拘らず、韓国は今までのところ、その逆境の連続にも拘らず、前向きな形で韓国の近代化を促進してきたが、それは先進国からの近代的文物の導入と相俟って韓国の儒教文化の伝統に負う所が少なくない、この意味で伝統的儒教文化は見つめなおさなければならない。マックス・ウェーバーがいつているような、儒教文化が近代化の促進にマイナス的要素だけをもつものではない。韓国における近代化の道は遠く、多くの問題をかかえている。伝統的文化と現代社会で培われた韓国人の知恵と経験はそれらの障碍に対して、以後、成功裡に対処していくであろう。こうした可能性は韓国の今までの近代化のプロセスが事実として示していることと思われる。

注

(1) 朝鮮社会に使われていた鑄貨の小銭を韓国人は葉錢(ヨプチョン)と言っている。植民地時代に日本人が韓国人を蔑称して「葉錢」といつていたようであるが、韓国人の一部では、韓国人は他に誇り得る才能と伝統をもたない民族であるという自虐的な意味で自らを葉錢ということがある。

(2) 朝鮮社会での身分は大きく両班、中人、常民、奴婢の四つに分けられるが、両班は権力機構の中で政策決定者であり、中人はその決定

を実務的に遂行する身分層であった。中人はこうした役割のために「胥吏」、「衙前」とも言われた。

(3) 科挙とは朝鮮時代に高位官僚になるための資格試験であり、登龍門であった。科挙には文科と武科などがあつたが、武科よりは文科の科挙合格が榮譽あるものとされていた。

(4) レオン・バンデルメールシュの著書は福鎌忠恕博士の翻訳がある。「アジア文化圏の時代」大修館書店、一九八七年。